

2023 年度 特待入試
第 4 回

国 語

〔注意事項〕

- 1 問題は一から四までです。
- 2 時間は 50 分です。
- 3 下敷きおよび電算機つきの時計の使用を禁止します。
- 4 解答は、濃くはっきりと書くようにして下さい。
- 5 開始の合図があるまで問題用紙を開かず、手を触れないで下さい。
- 6 試験中はよそ見をせず、きちんとした態度で行って下さい。
- 7 何か物を落としたら、黙って手をあげて下さい。
- 8 他の受験生に迷惑となるような行為をしないで下さい。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学校六年生の藤崎航太は、父親とけんかの末、父方の祖父「じいちゃん」と暮らすことを選ぶ。しかし、電気も風呂もトイレもない山小屋暮らしや、夜に一人きりでミツバチの番をさせられることにながまんがでなくなることから、夜中に一人山道を抜けて父親のもとへ帰ろうとする。ところが、道に迷い、雨に降られたため、偶然見つけた洞窟で一夜を過ごした。

朝、航太は、洞窟から出て歩いているところを、町のおっちゃんたちに見つけられた。

おそろいの消防団のはっぴを着て、手に手に棒を持ったおっちゃんたちのひとりだが、泥だらけになって歩いてくる航太を見つけ、

「おーい！」

と、声をかけてくれたのだ。

おっちゃんたちの声を聞いた航太は、もう少しで泣きだすところだった。ひとりのおっちゃんが、魔法びんに入った温かいお茶を航太に飲ませ、もうひとりがチョコレートをくれた。

航太は、ほっとして、チョコレートをなめながら、あたりを見まわした。景色に見覚えがあった。意外にも、そこは山下牧場にほど近いところだった。冷えた体の上に毛布をかけてもらって、航太は、集落にあるじいちゃんの家にもどった。

「航太！ この、バカタレ！」

消防団の人たちといっしょに帰ってきた航太を見て、じいちゃんが玄関から飛びだしてきた。じいちゃんの目は、まっ赤だった。

消防団のおっちゃんたちが帰ると、じいちゃんは、泥だらけになっている航太のために、お風呂をわかしてくれた。じいちゃんが火を焚くと、あっというまにお風呂がわいた。

「おまえ、ミツバチの番がいやじゃったんか？」

いっしょにお風呂に入り、航太の背中をこすりながら、じいちゃんが聞いた。航太は、うんとうなずいた。

「いやならいやと、口で言え。わかったか」

「だけど、言ってもゆるしてくれなかったんじゃない？ バカタレとか言ってる」

「そ、そんなことはないわい」

じいちゃんが、めずらしくあわてた。

「わしだって、それほどわからずやじゃないぞ」

もごもごとそんなことを言って、じいちゃんは、先にお風呂を出ていった。

お風呂から上がると、今度は七輪しちりんに火がおこされ、皿やまもに山盛りの肉が出てきた。航太がお風呂に入っている間に、じいちゃんが用意したのだ。

「わあ、焼肉だ！」

航太は歓声かんせいをあげた。

「シシ肉じゃ」

「シシ肉って？」

「イノシシよ。ほんとは、子どもなんぞに食わせるのは惜おしいくらいじゃが、無事ぶじに帰ってきたけん、特別に食わせる」

じいちゃんは、A 口調で言うのと、赤々と炭火のおこった七輪の上に焼きあみを置いて、肉をのせた。それから、焼けた肉をつぎつぎと航太のお皿に放りこんでくれた。それで少し、おわびの気持ちをあらかわしているのかもしれない。

「うまいか？」

「うん。おいしい！」

はじめて食べるイノシシの肉は、こっくりと甘あまく、噛かみごたえがあって、航太はあっというまに山盛りの肉をB。

「それにしても、けがもせずよく帰ってきた。うんうん」

じいちゃんは、シイタケのように乾かわいた両手で顔をごしごしとこすって、何度も同じことを言った。

「…：じいちゃん、泣ないてる？」

航太は、そっと聞いてみた。

「な、泣なくか。バカタレ！」

③ じいちゃんは、顔をまっ赤あかにしてどなった。

航太の生活は、洞窟どうくつの発見で、がぜんおもしろくなった。

洞窟は、じいちゃんの小屋こやからかなりはなれた場所にあったが、山下牧場には近かった。それですぐに、見つけることができた。あたりには、ブナやカシといった、人の手の入っていない自然の森が広がっていて、道に迷わなかったら、絶対に見つけられなかっただろう。

航太は、洞窟のことは菜穂なほにも言わず、休みの日など、友だちの家に行くと言って、ひとりで洞窟をおとずれた。

(中略)

こうして何度も探検たんけんしているうちに、洞窟の中がどうなっているのか、だいたいわかった。コウモリの巣すのありかもわかったし、最初は、とても広く感じられた内部うちも、慣なれたいまではそんなに広く思えない。

毎回、新しく発見することはなくなったが、それでも、自分ひとり、秘密の場所を知っているというのは、たまたまなく気持ちがいいものだ。そこで、ひとりでゲームをしたり、宿題をしたり、おやつを持って行って食べたりして、なんだか王様になった気分になれる。

どんなにいばったって、＊なわき尚紀や翔は洞窟があることを知らない。ふたりが知らないことを、航太だけが知っている。それだけで、大満足だ。

大満足だけど、秘密を持っているというのは、なかなかの苦労だ。まず、しゃべりたくてたまらない自分をおさえなければならぬ。それから、注意していなければ、会話をしている、そこから秘密がほろっと出てしまうこともある。

このあいだも菜穂から、

「藤崎くん、最近、遊びに来なくなったけど、どこか別のところに行ってる？」

と聞かれて、

「うん、洞窟にね」

C 答えてしまったのだ。

「洞窟？ それ、どこ？」

「えっと、それは、あの、ダンジョンゲーム」

航太は、その場所をとっさに、人気のゲームの中にすりかえて、ごまかしたが、菜穂は変な顔をしていた。危ない、危ない。

洞窟の存在以外にも、航太の生活は楽しくなった。^④じいちゃんとの生活があまりいやでなくなったのだ。

じいちゃんは、あいかかわらず「よもだ」＊で、航太がここぞとばかりゲームを楽しんでも、時間がくれば電気を消す。突然、山小屋に移動することもあるが、それでも、そんなじいちゃんに腹が立つことは少なくなった。

梅雨つゆがあけると、じいちゃんは、航太とミツバチをつれてまた山小屋にもどった。秋になってシイタケの仕事が始まるまで、山の手入れをするのだ。

じいちゃんの山には、シイタケ栽培さいばいをするクヌギやナラの自然林のほかに、スギやヒノキなどを植林した人工林がある。じいちゃんは、長い柄えの先に鎌かまのついた伐採ぼつさいで、人工林の木の枝を切り落としたり、下草を刈かったりする。

伐採ぼつさいでもとどかない高い場所にある枝は、幹にはしごを掛かけて登って切っていく。

「じいちゃん、どうして枝を切らなくちゃいけないの？」

航太が、下ではしごを支えながら聞くと、

「枝打ちせんと、山が荒れるんじゃ」

じいちゃんが答えた。

「ちゃんと枝を切って、地面にまで光があたるようにしてやらんと、木は枯かれる。ほら、向こうの山を見る。手入れをせんけん、木が倒れとるじゃろ」

じいちゃんの指さすほうに目をやると、たしかに木が何本も倒れている。木が倒れているところは、草も生えていなくて、土がむき出しになっている。

「ああいうところは、山に力がなくて、台風なんか来ると、斜面しづめんがくずれる」

「どうして、あの山の人は、手入れをしないの？」

「山は金にならない。じゃけん、だれも手入れをせんよ。都会に住んで、帰ってこない者もいるし」

「けど、じいちゃんは、ちゃんと手入れするんだね」

航太は、上から落ちてくる、まだ青いスギの葉を拾いながら言った。これは、航太の仕事だ。

スギの葉は、ひもでしばって、軽トラで家に持って帰り、乾かして、お風呂を焚くのに使うのだ。いまでは、ちゃんとわかっている。

「じゃが、スギやヒノキの山ばかりでもいかん。ナラやクヌギみたいに、どんぐりのなる森も残しておかんと」^⑤

「それは、どうして？」

航太は、目をパチクリさせた。

「動物のために、食べもののある山もないといかんじゃろが。食べものなくなった動物が山から下りてきて、それを害獣がいじゅういうて殺すが、人間のつごうばかり言う」とると、いつかバチがあたるぞ」

思ってもなかった、じいちゃんの言葉だった。^⑥じいちゃんの頭の中には、航太の知らない風景が、いっぱい広がっているのかもしれない。

佐和みずえ 『じいちゃんの山小屋』より（一部、改変があります。）

* 山下牧場……航太の同級生である菜穂の家。

* 尚紀や翔……航太の同級生。転校生の航太に意地悪をする。

* よもだ……愛媛県の方言で、「へりくつをこねる人」、「変わり者」という意味。

問一 A、C に入る語として、最も適するものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|-------|---|---------|---|-------|---|--------|
| A | ア | おおらかな | イ | もったいぶった | ウ | ほっとした | エ | はきはきした |
| C | ア | ちゃっかり | イ | しっかり | ウ | すっかり | エ | うっかり |

問二 B には「残さずすべて食べた」という意味の言葉が入る。「食べる」という言葉を使わずに、ひらがな五字で答えなさい。

問三 部①「もう少しで泣きだすところだった」とありますが、その理由として最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア じいちゃんの知り合いの町のおっちゃんたちに家出の理由を聞かれたら、なんと答えたらよいかこまったから。

イ 一晩行方不明だったにも関わらず、じいちゃんが探しに来てくれないことに気づき、悲しい気持ちになったから。

ウ 一人ぼっちで山道に迷い、雨に降られ、洞窟で一夜を過ごしたことを思い出し、急に恐怖を感じたから。

エ 道に迷い、一晩中山の中に一人でいたところを大人が見つけてくれて、緊張が解け、安心したから。

問四 部②、③の「じいちゃん」の目や顔が「まっ赤」とありますが、その理由として最も適するものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 航太に凶星をつかれて、恥ずかしかったから。

イ 航太の生意気な言葉に、とても腹が立ったから。

ウ 航太が本音を言わないことがおもしろくなかったから。

エ 航太がかわいくてしかたがないから。

オ 航太が心配で、寝ずにいたから。

問五 部④「じいちゃんとの生活があまりいやでなくなったのだ」とありますが、その理由として最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 山の暮らしの便利さや、じいちゃんが実は「よもだ」のふりをしているだけだということに航太が気づいたから。

イ 航太が、洞窟を秘密基地とし、自分だけの秘密や時間を持てるようになって、心の余裕が生まれたから。

ウ 山の生活に少しずつ慣れ、じいちゃんの言動の意味や考えを航太が少しずつ理解し始めたから。

エ 航太が無事に戻った日から、航太の話や要望をじいちゃんが何でも聞いてくれるようになったから。

問六 部⑤「どんぐりになる森も残しておかんと」とありますが、その理由として最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 木を枯らさないようにしないと、山の斜面が台風などでくずれ災害が起きるから。

イ 食べるものを採って山から下りてくる害獣が増えると田畑が荒らされ、人間がこまるから。

ウ 人間が動物の食べ物をうばったのに、害獣だといって山から下りた動物の命をうばうのは人間の勝手だから。

エ スギやヒノキの人工林だけでなく、ナラやクヌギの自然林を守ること、森に多様性が生まれるから。

問七 部⑥「じいちゃんの頭の中には、航太の知らない風景が、いっぱいいっぱい広がっているのかもしれない」とありますが、どういうことですか。わかりやすく説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

南極から日本に戻り、ふたたび日々の生活に忙殺されていたある日。雨上がりに出てきたのであろう一匹のナメクジが、コンクリートの壁をはっているのが目に留まりました。ナメクジは体の約9割が水分です。人間や動物のような皮膚や毛はなく、体表に粘液を出して乾燥から身を守っています。そのナメクジに塩をかけるとナメクジと塩の間で水分の引っ張り合いをして結局、ナメクジの体から水分が奪われ、ナメクジの体は縮みますよね。つまり、「乾燥」と「塩」は表裏一体です。「乾燥」と聞いて思い出すのが、砂漠。

「暑い砂漠にも、水をめぐる塩とのつな引きに負けない微生物がいるのだろうか」

と考えるようになりました。深海や南極、北極といった極限環境にいるコスモポリタンであれば、炎暑の砂漠にいてもおかしくはありません。それからは僕の頭の中は砂漠でいっぱいになって、折に触れて周囲に「砂漠に行きたいなあ」と口にするようになりました。

そうしているうち、チャンスが訪れました。僕の母校、筑波大学が北アフリカ研究センターを新設したのです。センターは、地中海からサハラ砂漠にいたるエジプト、リビア、チュニジア、アルジェリア、モロッコ、モーリタニアの国々が持つユニークで多様な可能性を、連携して研究することを目的としています。

「長沼君、シンポジウムがあるから、チュニジアに来ない？」

と、関係者の一人が声をかけてくれました。チュニジアは、サハラ砂漠の東端にあります。そして、シンポジウムの後のエクスカション（遠足、小旅行）でサハラ砂漠に行くといえます。ナメクジを見て以来、砂漠のことを考えていた僕にとってはまさに渡りに船。僕は北アフリカ研究センターの人たちとサハラ砂漠に行くことになりました。

僕の砂漠の印象は月並みで「砂一面、なにもない所だな」というものでした。南極や海と同じように、360度見回しても、なにもない所に身を置くときの感覚です。もちろん、砂漠のどこかにはフェネックキツネ、蛇やトカゲの仲間などの生物はいます。だけど、見渡す限りなにもなくて、単純に生き物感がまるでない。大自然の中にポツンと立ったとき、「人間のいない場所って、こんなに広いんだ」って改めて感じたのです。僕は気持ちの上ではいつも広い視野を持っていたと思っていますが、知らず知らずのうちに世界を都合良く「切り取って」います。特別変わったことに出会っても、それは僕が見たり聞いたり知っていることの中の特別なのであって、世界の中で超スゴイとは限らない、むしろ、それすら世界の一部でしかないのです。地球全体を俯瞰してみると、人間がいない場所のほうが遥かに多い。そんなことは頭ではわかっているけれども、実際に足を運び、その景色を目の前になると、「ああ、本当にそうなんだな」と強く感じました。知れば知るほど、Cの大きさが身にしみるものです。

砂漠のあるチュニジアにも、四季はめぐります。冬や春先はぐっと冷え込み、平均気温は首都のチュニスで10℃前後。その一方で、夏になると内陸部や砂漠地帯では40℃を超える暑さです。砂の表面は50℃ほどにもなると、とてもじゃないけど裸足では歩けない。それでも湿度は低く、空気はとても乾燥しているので、気温が高い割にはさほど苦しくはありません。もし、あの暑さで、湿気があったらこの世の地獄でしょう……。

そんな砂漠の街で、ひとりであらうあらししていたときに、僕はある絨毯屋の店主と出会いました。扱う絨毯は良い品物で目は細かく、デザインも洗練されています。1枚20万円ほどする高級品でしたが、品物を見れば適正な価格だと思いました。近くに遺跡があるため、店には大勢の観光客が訪れます。観光客は絨毯を値切ろうとしますが、店主は相手にしない。彼らはバスが休憩停車している10分程度だけ店に寄って去って行きました。そのやり取りをなんとなく見ていた僕に店主が「今から、絨毯の話をするから聞いてくれ」と、僕にチャイ（お茶）をすすめてくれました。「この絨毯は、何百キロと遠く離れた場所で織られたもので、織った人間はもう何年も前に死んで、この世からいなくなってしまう。それで、いろんな人の手を渡ってここにあって……」と、自分自身の生い立ちまで語り始めました。チャイは甘ったるく、店主の話は長かった。店主は絨毯を売るよりも、絨毯にまつわる話を誰かと共有したいのではないかと思いました。観光客たちは10分で去っていきます。彼が値切りには応じなかったのは、「時間をかけないなら、せめてお金をかけろ」ということだったのかもしれませんが。僕らの社会ではよく「タイム・イズ・マネー」と言います。でも、本当は、そもそも時間とお金は「交換」できるようなものじゃない。なぜなら、時間というものは「物語」を持っているから。長い時間が紡ぎ出す「物語」を共有することに意味があるんじゃないか。この本のテーマである生物や生命の話からは逸れますが、僕は砂漠で出会った商人から、そういうことを学んだような気がします。

長沼毅『生命の始まりを探して僕は生物学者になった』より

* 忙殺……ひじょうにいそがしいこと。

* コスモポリタン……本文においては、「どこにでもいられる」微生物のことを指す。

* シンポジウム……討論会の一つの形式。

* 俯瞰……全体を上から見ることに。

* タイム・イズ・マネー……「時は金なり」。時間は貴重なものだからむだに費やしてはいけないという意味。

問一 ―― 部 A 「折に触れて」・B 「渡りに船」の意味として最も適するものを、次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

A 「折に触れて」

ア 人と触れ合うたびに イ 人から聞かれるたびに

ウ 機会があるごとに エ 知らせがあるごとに

B 「渡りに船」

ア 事前の準備が大切であるということ イ 便利なものが目の前に並んでいること

ウ 物事は早く進めるのがよいということ エ 都合よく望み通りの条件がそろうこと

問二 — 部①「乾燥」と「塩」は表裏一体です」とありますが、どういことですか。最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「乾燥」と「塩」はひじょうに深い関係にあるということ。

イ 「乾燥」と「塩」は同じ仕組みをもつものであるということ。

ウ 「乾燥」と「塩」は生き物にとって大切なものだということ。

エ 「乾燥」と「塩」は正反対なはたらきをするものだということ。

問三 — 部②「チャンスが訪れました」とありますが、これはどのような「チャンス」ですか。最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 新しい研究センターで学べるチャンス イ 興味のある砂漠に行けるチャンス

ウ チュニアを再び訪問できるチャンス エ アフリカで研究ができるチャンス

問四 — 部③「世界を都合良く「切り取って」います」とありますが、どういことですか。最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が知らない場所は「世界」のどこにも存在しないと考えているということ。

イ 自分が広い視野でとらえれば「世界」も広がっていくと願っているということ。

ウ 自分が訪れた場所以外にも確かに「世界」があると信じているということ。

エ 自分が見聞きしたものがまさに「世界」の姿だと思っているということ。

問五 — 部④「ああ、本当にそうなんだな」と強く感じました」とありますが、筆者はどのようなことを感じたのですか。文中の表現を用いて説明しなさい。

問六 — Cに入る語句として最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア なにもないこと イ 体験したこと ウ 知らないこと エ 生きていること

問七 — 部⑤「店主は絨毯を売るよりも、絨毯にまつわる話を誰かと共有したいのではないかと思いました」とありますが、筆者は店主の考えをどのように理解したのでしょうか。その説明として最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア お金をもうけることよりも、自分の生い立ちを出来るだけ多くの人に知ってもらいたいという考え。

イ 一枚の絨毯にはそれに関係するさまざまな人の思いが詰まっていることを分かち合いたいという考え。

ウ 観光客には、絨毯の歴史をきちんと学んだ上で本当に気に入ったものを買ってもらいたいという考え。

エ すぐに立ち去ってしまう客に、長い時間をかけて作られた絨毯の良さを分かってもらいたいという考え。

三 次の1～5の□に適する語を後のア～オから一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じ記号は一度しか使えないものとします。)

1 □ 兄は約束の時間に来るだろうか。

2 □ あなたにこの美術作品を見てもらいたい。

3 □ 雨が降っても試合は行う。

4 私の实力では□かなわない。

5 あの雲は□わたがしのようなのだ。

ア はたして イ まるで ウ たとえ エ ぜひ オ とうてい

四 次の——部のカタカナを漢字に直しなさい。

1 大キボな工事が始まる。

2 新聞のゴウガイが出る。

3 祖父のコウセキがたたえられた。

4 アツかましい態度。

5 弟に家事をマカせる。



